

序論)

先週は、私達が公同の教会であり、富んでいるものであり、【主】が私達を堅く保ってください。ということをお教えされました。

今日の箇所からいよいよ。コリントの教会が抱えていた問題に対して、パウロが回答をしている箇所となります。コリントの教会が抱えていた問題の 1 つ目は、ずばり教会派閥の問題でした。

教会は罪人の集まりですから、なかなか一致することが難しかったり、協力できなかったりします。それはなぜなのでしょう。そして、この教会派閥の問題を解決するためにはどうしたらいいのでしょうか。

聖書から教えられていきたいと思います。

1) コリント教会が抱えていた問題

①パウロはどのようにしてコリントの問題を知ったのか

パウロがコリント教会の問題を知ったのは、彼がエペソにいた時のことでした。クロエの家に属する者たちが、教会に争いがあることを知らせてきたのです。

「クロエの家の者」という表現から、彼らはおそらくクロエの家に仕えていた人々であったと考えられます。そして、そういった人たちをわざわざエペソにまで派遣できるということは、クロエの家はある程度裕福な商人の家庭であったのでしょう。

ですから、パウロはクロエの家の使者を通してコリント教会の内部で争いが起きていることを知ったのです。

②争いの内容

では、その争いとはどのようなものであったのでしょうか。それは、パウロが関知しないところで、教会の人々が勝手に「パウロ派」「アポロ派」「ペテロ派」「キリスト派」と分かれてしまっていたということです。ちなみに、12 節に出てくる「ケファ」とはペテロのことを指しています。

続くパウロの言葉からも明らかなように、彼自身が「パウロ派」を作ろうとしたわけではありません。むしろ、パウロに影響を受けた人々が、独自にそのような呼び名でグループを作ってしまったのです。アポロ派やペテロ派も、おそらく同様であったと

思われます。アポロやペテロ本人が派閥の先頭に立ったのではなく、まわりの人々が勝手にそのような分裂を起こしてしまったのでしょう。

さらに、人の名前を掲げているこれらの派閥とは別に、「キリストの名を掲げる」と主張する人たちもいたようです。

教会の歴史を振り返ると、残念ながら分裂や分派の歴史があることは否めません。たとえば、カトリックからプロテスタントが生まれたのも、一つの大きな分裂でした。その後も、「幼児洗礼を認めるかどうか」「長老制度と会衆制度のどちらを採用するか」「聖さをどのように追い求めるか」といったさまざまな問題をきっかけに、教会は分かれていきました。

ただ、これらの分裂は「どのようにすれば聖書の教えに従うことができるか」という真剣な思いから起こったものであり、ある意味では致し方ない分裂だったと言えるかもしれません。

③あってはならない分裂

一方で、あってはならない分裂も存在します。それは、コリント教会で起こったように、人に目を向けることから始まる分裂です。

12 節の

1:12 あなたがたはそれぞれ、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言っているとのことです。

という箇所は、コリントの教会がまさに人を見て派閥を作っていたことを意味しています。

また、パウロは 13 節で次のように語っています。

1:13 キリストが分割されたのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか。

ここでははっきりと述べられているように、私たちを救うために十字架にかかってくださったのはキリストです。そして、洗礼もまたキリストの名によって授けられるものです。

キリスト者とは、キリストの十字架によって救われ、キリストの名によってバプテスマを受けた者のことです。であれば、キリスト以外の名前による派閥ができるというのは、そもそもおかしいことだと言わざるを得ません。

教会が不健全な派閥争いを始めるとき、その原因は「キリストから目をそらし、人に目を向けてしまうこと」にあります。

どれほど優れた牧師や宣教師、説教者であったとしても、その人物を通して語られるキリストを見上げることをやめてしまうなら、教会には分裂が生まれてしまうのです。

実際に日本でも、教会の中で分裂が起きるときがあります。その多くは、次の2つのケースに当てはまると言われています。

一つ目は、祈りと御心を求めないままに会堂の建築を進めてしまう場合です。ただ「新しい建物が欲しい」とか、「そろそろ建て替えるべきだ」と一部の人たちが声を上げ、祈りを欠けたまま計画を進めてしまうと、経済的な問題や人間関係の問題が表面化し、分裂が起こりやすくなります。

二つ目は、牧師や教会のリーダーが交代するタイミングです。たとえば、宣教師の先生が開拓された教会に日本人の牧師が着任すると、「以前のやり方のほうが良かった」という声が上がって、教会が二つに割れてしまうことがあります。また、カリスマ的な強いリーダーシップを持った牧師から、違うタイプの牧師に交代したときにも、同じような分裂が起こることがあります。

こういった分裂の背景には、「主を見ることをやめて、人に目を向けてしまっている」という姿勢があるのです。

教会は、キリストではなく、牧師や役員といった人間に目を向けたときにこそ、分裂しやすくなります。

パウロは世界をまたにかけて活躍した大伝道者ですし、アポロは雄弁で、聖書に深く通じた人物でした。コリントでは、ユダヤ人たちと議論してキリストを力強く証しし

た人物でもあります。そして、ペテロは「この岩の上に教会を建てる」とイエスに言われた存在であり、使徒のリーダー的な立場にあった人物です。

そのような人たちに感銘を受け、尊敬するのは、ある意味で自然なことだと思います。

しかし、どれほど優れた指導者であったとしても、キリスト者が見上げるべきお方は、その人物ではなく、主イエス・キリストであるはずなのです。

2) 伝道者の願い

コリントの教会では、キリストではなく、人に目を向けてしまっていたために、「自分が誰から洗礼を受けたのか」を誇るような人たちもいたようです。

そのため、パウロは、コリント教会で多くの人にバプテスマを授けなかったことを、神に感謝していると語ります。14 節から 16 節を読んでみましょう。

1:14 私は神に感謝しています。私はクリスポとガイオのほか、あなたがたのだれにもバプテスマを授けませんでした。

1:15 ですから、あなたがたが私の名によってバプテスマを受けたとは、だれも言えないのです。

1:16 もっとも、ステファナの家の人たちにもバプテスマを授けましたが、そのほかにはだれにも授けた覚えはありません。

この「クリスポ」という人物は、コリントにあったユダヤ人の会堂のリーダーです（使徒 18:8 参照）。「ガイオ」は、パウロの第三回伝道旅行の際に宿を提供し、自宅を教会の集会所として開放していた人です。たとえば富川で言えば、岩寺さんのような存在だと言えるかもしれません。

そして、16 節に出てくる「ステファナの家の人たち」は、この手紙の後半（16:15）に「アカイアの初穂」と記されています。アカイアとは、コリントが属していたアカイア州のことを指していて、ステファナはこの地域で最初に信仰を持った人物だと思われます。

パウロは、これらの限られた人たちにしか洗礼を授けなかったことを、神に感謝して

いるのです。

「伝道者が洗礼を授けていないことを感謝する」というのは、一見すると奇妙に思えるかもしれませんが。しかしパウロは、自分が洗礼を授けることによって、それが人々の誇りとなるようであれば、むしろ授けなかった方が良く考えていたのです。

これはパウロが洗礼を軽んじていたという意味ではありません。大切なのは、誰から洗礼を受けたかではなく、キリストを誇りとするすることであると、彼は強く信じていたのです。

この思いは、パウロに限られたものではありません。私を含め、すべての伝道者が願っていることでもあります。

牧師や宣教師など、伝道の務めを担っている者たちが心から願っているのは、信徒の方々が自分たち教師ではなく、イエス・キリストとしっかりと結びついて、キリストを誇るようになることです。

時には、自分に強い影響を与えてくれた先生や教師に、深く結びつこうとする人もいます。

たとえば、牧師が交代したあとにも、教会とは別の場所で以前の牧師の指導を受け続けていたり、自分の教会の説教よりも、他の教会の説教を取り寄せて大切にしたりする人がいます。最近では、インターネットを通して他の教会の説教を聞くことができるため、自分が好んでいる先生のメッセージだけを定期的に聞いている、という方も増えています。

実際、川崎の教会でも、チョ・ナムス先生の説教を毎週聞いている一方で、実際には他の教会の先生の指導を受け続けている方がいました。このようなことは、他の教会でもよく耳にする話です。

牧師たちは、自分の教会にそのような方々がいることを知っています。しかし、それについて特に強く指摘することはしません。

なぜかというと、大切なのは「誰から指導を受けているか」ではなく、「その人がキ

リストとしっかり結びついているかどうか」だからです。

ですから、もし自分の存在がその信徒の方にとって、キリストと結びつく妨げになっているのであれば、牧師は喜んで身を引くことさえあります。

パウロが、彼自身がコリントの人々に洗礼を授けていなかったことを神に感謝しているのも、きっと同じ理由によるものだと思います。

大切なのは、人ではなく、キリストにしっかりと結びつくことです。

伝道者や教職者の願いは、信徒一人ひとりが人を頼るのではなく、直接キリストと結ばれることなのです。

言い換えるならば、「キリストの十字架と福音にしっかりと根ざすこと」こそが、教会の人々にとって最も重要なことであると伝道者は願っています。

だからこそ、パウロは 17 節で自分の使命を次のように説明しています。

1:17 キリストが私を遣わされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を、ことばの知恵によらずに宣べ伝えるためでした。これはキリストの十字架が空しくならないようにするためです。

パウロは、「自分が遣わされたのは洗礼を授けるためではなく、福音を宣べ伝えるためである」と語っています。そして、その福音を語るときには、「ことばの知恵」ではなく、「キリストの十字架」を前面に出すようにしていたのです。

パウロは律法に通じたエリートでしたから、人々にわかりやすく、納得しやすいように話すことも十分にできたはずです。しかし、彼はあえてそうしませんでした。

それは、キリストの十字架こそが、私たちがしっかりと握りしめるべき真理であり、神の力であると確信していたからです。

今月は 5 月に入りましたので、新しい暗唱聖句を覚える時となりました。その聖句が次の 18 節のことばです。

1:18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。

このみことばについては、来週さらに詳しく学ぶ予定ですが、ここではっきりと覚えておきたいのは、「十字架のことば」は神の力そのものであるということです。

ですから、私たちは「人」を誇るのでもなく、「バプテスマ」を誇るのでもなく、「十字架のことば」をしっかりと握りしめ、キリストと結びついて歩んでいきましょう。

3) 一致するためにどうしたらいいか

それでは、コリント教会が抱えていた最初の問題、つまり「分裂」という問題をどうやって解決すればよいのでしょうか？

ここで、改めて 10 節のパウロの言葉を確認してみたいと思います。

1:10 さて、兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたにお願いします。どうか皆が語ること一つにして、仲間割れせず、同じ心、同じ考えで一致してください。

パウロは、この中で教会が一致するために大切なことを 4 つ語っています。

①主イエス・キリストの名によって

すでに見てきたように、教会が問題を抱える原因の多くは、キリストから目をそらし、人に目を向けたり、問題そのものを見つめたりしてしまうことにあります。

だからこそ、私たちはいつも「主イエス・キリストの名によって」歩むことが必要です。

問題が起こったときにはキリストを見上げて、御心を尋ね求め、行動を起こすときも、主の御名によって、主の導きに従って実行していくべきです。

仕事も、学びも、家庭の営みもすべて、キリストの名によって歩むことが大切です。そしてそれは当然、教会という「主の群れ」の歩みにおいても同じです。

②皆が語ることを一つにして

この部分を直訳すると、「皆、同じことを語りなさい」「一つのことを語りなさい」となります。

それぞれがバラバラに異なることを語っていたら、当然一致はできません。

教会は、個人の意見をぶつけ合う場ではなく、心一つにして、同じことを語っていく場であるべきです。

そのために、教会には「信仰告白」があります。

私たち富川福音教会では、隔週で使徒信条を告白していますが、これは、自分たちが何を信じているのか、何が福音なのかを改めて確認し、同じ信仰に立つためのものです。

また、日本同盟基督教団としての信仰告白も存在しています。内容が長いため普段の礼拝では用いていませんが、先週「地域協会を超えた公同の教会を意識すべきだ」と学びました。ですので、年に何回か、教団の信仰告白を皆で声に出して告白し、教団としての一致を覚える時を持つことも良いことでしょう。

③仲間割れせず

これはつまり、「分裂や分派を起こしてはいけない」ということです。

教会は、派閥を作ることよりも、一致することに力を注ぐべきです。そのためにも、陰口を言ったり、教会の外に別の集まりを作ったりしてはいけません。

④同じ心、同じ考えで一致

意見や考えが違って、仲間割れせずに一致するには、どうすればよいのでしょうか。

それは、共に主を見上げ、一つの信仰、一つの福音に根ざした意見交換をし、一致する努力を続けていくことです。

私たちは同じ「十字架のことば」を持ち、キリストの名によって救われた者たちです。この真理に根ざして、心と意思を一つにすることをあきらめずに取り組む必要があります。

「心と考え」は言い換えれば、「感情と理性」のことです。
現代社会では、人が感情的にも理性的にも一致することは簡単ではありません。人それぞれ意見や価値観があり、多様性を尊重するという風潮もあります。
しかし、教会が「一致すること」をあきらめてしまったとき、そこから分裂が起こり、主から目を離す結果となってしまいます。
だからこそ、私たちは感情的にも理性的にも一致することを、決してあきらめてはならないのです。
なぜなら、キリストは「二つのものを一つにしてくださるお方」だからです。
エペソ人への手紙 2 章 14～16 節を一緒に読みましょう。

2:14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、
2:15 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、
2:16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。

キリストは、私たちの間にある「敵意」という隔ての壁を打ち壊し、ご自身のうちに「教会」という一人の人を造り上げてくださいました。
私たちを罪から救い出してくださったキリストの十字架は、私たちの中にある敵意さえも滅ぼすものです。
だからこそ、私たちはこの十字架を信じ、キリストにあって一つになれると信じて、信仰によって心と考えを一致させていくのです。
そして、そのことをあきらめてはいけないのです。

結論)

パウロは、分裂したコリントの教会に対して、ただ表面的な和解を勧めたのではありません。彼が教会に求めたのは、「主イエス・キリストの名による一致」でした。それは、人を見て集まるのではなく、キリストを見上げて歩む一致です。

一致とは、感情や意見を無理にそろえることではありません。
キリストの十字架のもとに立ち返り、互いに赦し合い、神の力に信頼して心と考えを一つにしていくことです。

私たちの教会も、さまざまな背景や考えを持つ人々の集まりです。
だからこそ、パウロが語ったように、「キリストの十字架」を見上げて歩むとき、教会は一つにされていきます。
人ではなく、キリストを誇りとし、誰に仕えるのかを見失わないようにしましょう。
そして、一致することをあきらめずに歩んでいきたいと思います。